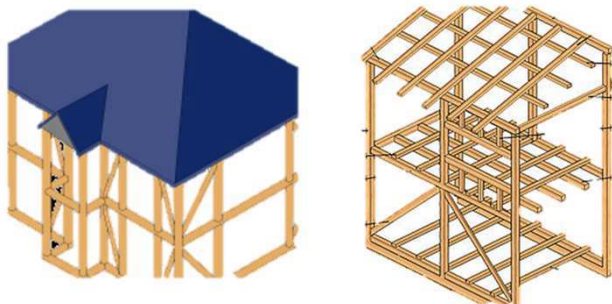


在来工法とは

日本で歴史深い木造構造

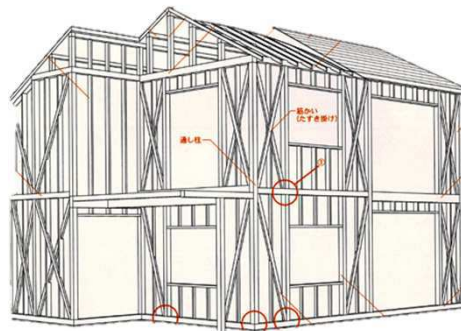
日本で古くから発達してきた伝統工法を簡略化・発展させた構法で、在来工法と呼ばれています。木造軸組構法では、主に柱や梁といった軸組（線材）で支えます。

木の柱と梁を組んで建てていくので、軸組工法とも呼ばれます。高温・多湿という日本の自然環境のなかで生み出され、育まれてきたものなので、伝統と実績は高く評価されています。



設計自由度が比較的高い工法

設計の自由度が高く、多彩なプランに対応できるという長所があります。在来工法では建物を柱と梁で支えるので、複雑な形状の敷地に合わせて建てることができ、開口部も広くとることができます。また、将来の増改築も行いやすいというメリットがあります。



震災以降、耐震基準が改正されました

約8割がこの工法で建てられています。阪神大震災では、この在来工法による建物が倒壊したことが広く知られていますが、しかしそれは昭和56年以前の古い建物や耐震基準を満たしていない建物がほとんどで、平成以降の新しい建物ではほとんど被害がありません。



均一な品質・性能確保はプレカットで

耐震面では阪神大震災の被害をキッカケとして、建築基準法が平成12年に改訂され、耐震化が図られました。しかし、工法として複雑なため、やはり大工さん等の職人さんの腕によって、仕上がりが耐久性といった家の出来栄に、大きな差が出てしまうのも事実です。それを解消するために、最近では大工さんの腕に左右されない、プレカットと呼ばれる工場での木材加工が主流となって、現場ではそれを組立てるだけという状況が主流になっています。

